

「俳句における言葉の露点と景色」の邦訳によせて

臨床心理士・公認心理師・カウンセラ

三村 和子

今年2月に寄稿したオーギュスタン・ベルク著「俳句における言葉の露点と景色」邦訳について、識者の方々から感想をいただいています。これまでに寄せられた感想を元に、「言葉の露点」の重要性について検討します。

基礎情報学を創始された西垣通先生から特筆すべきご意見をいただきました。「きわめて示唆に富む内容」であること、さらに「現代のIT文明をきちんと批判的にとらえ、設計者の意識を変えるのに有用」であるとのこと。「言葉の露点」の考え方を情報システム産業あるいは研究分野などの関係者が理解することが大変重要であること、そして日本のISプロジェクトではマネジメント／エンジニアリングの各工程において、言葉の露点に欧米と差があることを前提としたコミュニケーションへと変化させ、プロジェクトマネジメントに適用していく必要があることを今後も訴えていきたいと思います。

次に、教育社会学の研究者で日本の学校教育の課題について研究する専門家からの感想を紹介します。バーンステインの言語コード論との関連でベルク氏が記す主語ゼロの持つ重要性を理解したとのこと。バーンステインは、英国の社会学者、言語学者であり、1960年代の教育が画一的であると批判し、子どもの出身により認知や理解に用いる「言語コード」が異なることを実証しました。バーンステインの検証では、労働者階級の子どもは日常的なルールを用いた文脈で理解していたのに対して、中産階級出身の子どもは抽象化を用いていたとの結果が示されました。

「学校知識コード」と「日常知識コード」、そして「精密コード（言葉で内容が表現されている）」と「制限コード（状況の共有を前提とした者同士で通じる）」との違いなどの点で、重要な示唆がある可能性があるとのこと。日本でもこの言語コード論は教育分野に取り入れられていますが、「言葉の露点」を併せて検討することによって教育システムの再考とレベルアップが期待できます。

また、管理栄養士で若者の支援をしている知人から、「阪神淡路大震災後のあたりから、言葉の露点が急激に『見える化』にシフトしていったのではないか」「ゼロイチの世界に否応なく適応すべく『見える化』が進んできたのと同時に心の病も増えたように思います」との感想をいただきました。

ここでの「見える化」とはデジタルデータによるメッセージのやり取りやネット上にあふれる情報のことを示すものと思われます。また、阪神淡路大震災が発生したのは1995年です。この時期はPHSや携帯電話の契約台数が増加し、1999年にはNTTドコモによる携帯

電話対応のインターネット接続サービス「iモード」が始まり、アナログからデジタルへとシフトした時期です。

この頃は電車に乗ると 7 人掛けの席に座っている人が全員携帯電話をじっと見ているという光景を珍しく眺めていた時期でしたが、今や人々がスマホを凝視する様子はあらゆる場所で見かけるようになりました。これらの人々は車窓から見える景色を眺めて季節を感じたりする時間を失っています。人々は視覚に次々と入る文字や映像情報に網殺され、自らの内面に意識を向ける余裕がありません。結果として、生命情報が活性化されない状態が続いていると考えられます。

主語ゼロについては、IS 企業の経営および管理に長く携わった方から次のような感想も寄せられました。主語ゼロを楽しむ俳句の世界と「主語／論理などをしっかりとさせなければならない情報システムの世界」とは対極にあること、そして、IS プロジェクトで主語ゼロの価値観での言動は、はっきりさせようという周囲から圧力を受ける懸念があり、感情的な交流がしづらくなる懸念があるとのことでした。

いただいた感想にとっても刺激を受けて、問題意識をより強く持ちました。感謝申し上げます。

さて、先月号の芳賀正憲さんのメルマガ「『世の中の仕組み』はどうなっているか」で日本と米国において世の中の仕組みがどのように異なるかについての図式が提示されています。ここで提案された日本が国際競争力を高めるための改革である両刀使いも「言葉の露点」と深く関連があります。両刀使いとは、{コード、論理、対話}に依存するものに変えていき、社会的知性を育成することに注力すること、その際 {コンテキスト、経験・感性、以心伝心} 文化の持つ優れた特質を活かす、この 2 つの特質をバランスよく発揮することが提案されています。

ここで示される{コード、論理、対話}の「対話」は、社会情報や機械情報として言語化されるものを指します。IS 産業で、プロジェクトを推進する中でこれらの情報は、上司から部下へ、あるいは先輩のプロジェクトリーダーから後輩へ伝え継がれていきます。プロジェクトでのコミュニケーションに信頼感があり、感情的な交流がなされると、情報の源流を辿り、生命情報を喚起することができます。受け継いだ情報を活かすという姿勢や信念を元に、プロジェクトチームの連帯が強まり、様々な困難を乗り越え成功に向かって最後までやり遂げる原動力ややりがいにつながると考えます。

今後も「言葉の露点」について更に検討を続けていきます。皆様からのご意見をお待ちしています。

<参考>

*1)教育の社会学理論 象徴統制、教育の言説、アイデンティティ バジル・バーンステイン著 久富善之ほか訳 (2000) (叢書ユニベルシタス). 法政大学出版局

*2)総務省 情報通信白書令和元年版

<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r01/html/nd111110.html>